P2-022

幼児を持つ父親の育児感情と関連要因 －育児への肯定感・否定感に焦点を当てて－

榊 公一[1]、福丸 由佳[2]

[1]白梅学園大学大学院　子ども学研究科、
[2]白梅学園大学　子ども学部

【目的】
これまで、共働き家庭の増加などの育児環境の変化を背景に、父親の育児参加推進に向けた様々な施策が打ち出されてきた。しかしながら、父親の育児・家事への関わりの実態は、今まで以上に関わりたいと願う父親が増加しているにもかかわらず、大きく変化していない（ベネッセ次世代育成研究所,2015）。そこには、ワーク・ライフ・バランスの重要性が指摘される現代社会にあって、父親が仕事役割と家庭役割との間に葛藤を抱えていることや、母親のみならず父親にも育児への不安があることも影響していると考えられる。こうした中で、父親が育児に関わることで生じる肯定感や否定感といった育児感情とその関連要因を明らかにすることは、今後、父親への子育て支援の検討や、男女共同参画を推進していくうえにおいても意義があると考える。そこで本研究では、幼児を持つ父親の育児感情について、夫婦関係、子どもの気質、職場環境、妻との育児・家事行為分担状況、実父母・義父母からの子育てへの協力状況、経済状況といった要因に着目し、その関連を明らかにすることを目的とした。

【方法】
調査対象：東京都、埼玉県、神奈川県の幼稚園、保育所に通う園児の父親。有効回答数は236名（有効回答率19.6%）。調査時期：2015年3月～6月。調査項目：育児感情、夫婦関係、子どもの気質、職場環境、妻との育児・家事行為分担状況、実父母・義父母からの子育てへの協力状況、経済状況、属性など。

【結果と考察】
育児感情と各変数との関連について検討した結果、父親の肯定的感情、否定的感情と夫婦関係、子どもの気質、職場環境が関連することが示された。また、経済状況が苦しいと感じている群は、楽と感じている群よりも「育児への肯定感」が有意に低く（$t=-2.11, p<.05$）、また、「育て方への不安感」、「育児へのストレス」が有意に高かった（$t=2.05, p<.05$；$t=2.22, p<.05$）。一方で、育児感情と妻との育児・家事行為分担状況、実父母・義父母からの子育てへの協力状況は相関関係を示さなかった。これらの結果から、父親の育児への肯定感や否定感といった感情には、夫婦関係、子どもの気質、職場環境、経済状況が影響を与えていることが示された。今後は、妻の就業状況や子どもの就園状況など父親の置かれた多様な状況を加味しつつ、父親の育児の実態を明らかにする必要があると考える。

P2-023

小児科外来における育児相談の実施と評価

三国 久美[1]、澤田 優美[2]、草薙 美穂[2]、
齋藤 早香枝[3]

[1]北海道医療大学　看護福祉学部　看護学科、
[2]天使大学　看護栄養学部　看護学科、
[3]札幌保健医療大学　看護学部　看護学科

【目的】
A大学病院小児科外来では，2015年6月から週1回，希望者に育児相談を実施している．育児相談を担当する支援者は，保健師もしくは助産師である．本研究では，育児支援を利用した母親の相談内容および母親からみた支援の評価を明らかにすることを目的とした．

【方法】
2015年6月から12月までにA大学病院小児科外来の育児相談を利用した母親への支援内容の記録をもとに，相談内容を把握した．さらに，支援を評価するため，承諾が得られた母親に質問紙を配布して，後日郵送で回収し，得られた結果を集計した．なお，北海道医療大学看護福祉学研究科およびA大学病院の倫理委員会の承認を得て実施した．

【結果】
育児相談を利用した母親は計72人で，1回あたり平均3.0人，所要時間は平均18.2分で最頻値は10分であった．子どもの年齢は，平均2歳1ヶ月であった．相談内容は，授乳や栄養（25人），言語などの発達（19人），湿疹など皮膚の手入れや清潔に関すること（10人）の順に多かった．12人の母親から支援の評価が得られ,全員が「この育児相談は自分と子どもにとって役立った」と回答した．その理由として，「医師に聞くほどではないと思うことでも聞くことができた」,「このように相談できる場があると分かり気持ちが楽になった」という記載があった．また，全員が「自分や児が尊重された」,「気分良く話せた」,「サポートされたと感じた」と回答し，9人が「役立つ情報が得られた」と回答した．全員が「この育児相談を受けて，良い変化があった」と回答した．良い変化として記載された内容には，「前向きにがんばろうと思えた」,「子どもと余裕をもって接することができた」などがあった．育児相談を担当する支援者に期待することとして，多くあげられたのは「保健師，助産師，看護師等の有資格者であること」(9人),「子どもの発育や発達について訓練を受けた者」(8人),「子育ての経験がある者」(8人）であった．支援者に望む資質として，「相談者の話をよく聞いてくれる人」と記載した者が多かった．

【考察】
小児科外来における育児相談の希望者は，幼児期前半の児を持つ母親が多く，相談内容は，先行研究の結果と同様に児の発達段階を反映した内容が多かった．支援の評価は高く，母親の心理面に良い影響を及ぼしたと推察された．短時間であっても，小児科外来において看護職が母親の心配事を傾聴し，育児支援を行う意義があると考えられた．

Presented by Medical*Online